



小学校教員養成特別コース
ついでしげき
筒井茂喜 准教授

◎研究メンバー

- 筒井茂喜** (兵庫教育大学准教授)
- 藤原典英** (兵庫教育大学附属小学校教諭)
- 佐々敬政** (明石市立和坂小学校教諭)
- 中島友樹** (西宮市立甲陽園小学校教諭)

関係的理解を促す体育授業モデルの開発 —5年生バスケットボールの授業を事例として—

「科学技術の革新的変化」「高度情報化社会の進展」「グローバル化の拡大」による社会構造の変革が訪れようとする中、学校教育では「身につけた知識・技術を活用することで、よりよく問題を解決できる児童生徒の育成」に資する授業の構築が求められています。

本研究で用いる「関係的理解」という概念は、近年、主に算数・数学教育において注目されているものです。「関係的理解」とは、学習内容の意味や基本的概念の理解を意味しており、「関係的理解」によって得られた知識・技術は、問題の文脈や形式が変わった場合にも活用できるとされています。

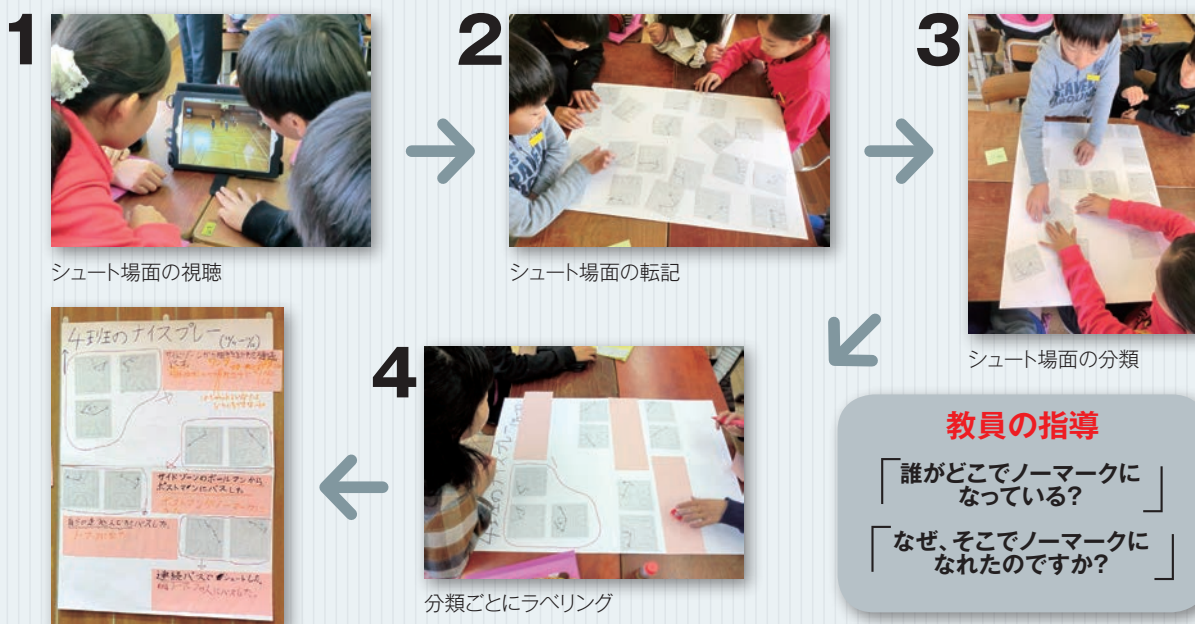
体育では正しいとされる体の動かし方、動き方の習得に主眼を置いた教え込み型の授業が数多く見受けられます。そのような授業には、「なぜ、この動き方をするのだろう」「この体の動

かし方にはどのような意味があるのだろう」という思考を働かせる余地はなく、また、その必要もありません。児童生徒は教員から指示された知識・技術の習得にただ励むだけです。しかし、このようにして得た知識・技術では、問題場面や状況が変わると活用できない可能性があります。すなわち、いろいろな状況下での問題の解決に活用するためには、「関係的理解」によって得られた汎用性の高い知識・技術が求められるといえます。

本研究では、試合における個別的・具体的戦術を整理・分類することで、その裏側にある戦術的原則を帰納的に導き出す「関係的理解」を促す学習モデルを仮説的に作成。小学5年生のバスケットボールの授業に適用し、汎用性の高い知識・技術ならびに汎用的能力としての帰納的思考力の習得を目指した体育授業モデルを開発しました。

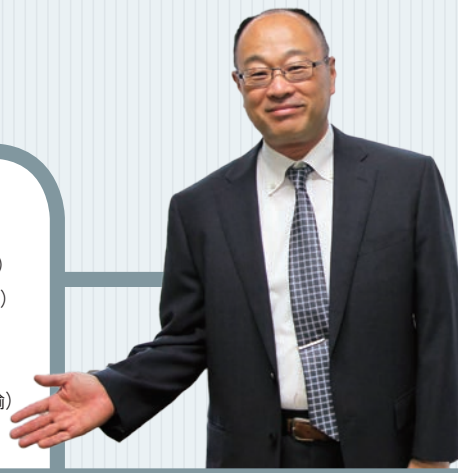
戦術的原則を導出する学習

次と次の間に設定された「戦術的原則を帰納的に導出」する学習



◎研究メンバー

- 米田 豊** (兵庫教育大学副学長)
 - 山内敏男** (豊川市立音羽中学校教諭(研究事業取り組み時))
 - 王子明紀** (三田市立上野台中学校教諭(三田市学校指導員))
 - 佐々木豊** (鹿児島市立和田小学校教諭)
 - 植田真夕子** (弥富市立日の出小学校教諭)
 - 下池克哉** (東串良町立東串良中学校教諭)
- ほか15人



授業実践開発コース
やまうち とし お
山内敏男 准教授

汎用的な能力の育成を意図した社会科教科書と授業の開発 —小中学校「環境」単元を事例として—

「習得・活用・探究」をキーワードにした授業を行うことが求められています。しかし、この理念は必ずしも学校現場に浸透しているとはいえません。問題の根底には、教員が学習指導要領改訂の理念を具体的な授業に落とし込むことの難しさがあります。そこで、このことを克服する具体例として、社会科で育むことができる汎用的な能力「思考力」「問題解決力」「他者と協働する能力」の育成を目指し、教科書と授業を開発しました。これらの能力を育成するために重視したのは、次の3点の学習です。

- 1 出来事を原因と結果の関係で捉える。
- 2 1を踏まえ、説明力が広い知識(=社会諸科学の研究成果)を習得する。
- 3 習得した知識を基に価値判断、意志決定をする。

取り上げたのは環境学習です。授業で取り扱う場面は増加している一方で、災害や環境破壊の様子などを覚えることにとどまる授業、「環境に優しいもの=善」という価値観を無批判的に受け入れさせる授業が多い傾向にあると捉えたからです。

開発した中学校公民的分野の単元「現在のエコは未来のエコか」では、主発問を「どこまで環境に対する配慮をすべきか」「どこまで環境に負荷をかけることを認めるか」と設定しました。

授業では、自然エネルギーを活用した発電の在り方について、さまざまな資料を基に子どもがゼロベースで検討しました。そして、より望ましい未来の姿を考えさせるため、資料からの読み取りを通して形成された社会認識を基に、事実の分析的検討を経た価値判断・意志決定場面を設定しました。

「環境を守るべきだ」と主張するだけでは、子どもの社会認識形成にも市民的資質の育成にも寄与しません。社会科としては、「現在の暮らしの維持と環境保全のバランスはどのように取るべきか」といった社会的論争問題を提示し、解決を迫っていくことが大切です。本研究の成果に基づく「環境」単元の授業モデルの開発をさらにに行い、授業実践を積み重ねていくことで、論の有効性を検証していきたいと考えています。

公民的分野 「現在のエコは未来のエコか」の教科書モデル

The image shows a collage of educational materials. On the left, there's a textbook page with a table and text. In the center, there's a bar chart showing data. On the right, there's a newspaper clipping with the headline '太陽光が未来のエコか' (Is solar power the eco of the future?). Below the newspaper clipping, there's a smaller graph and some text. The materials are arranged to illustrate the 'eco model' for the 'Environment' unit in the middle school civics curriculum.

◎研究メンバー ※所属・職位は平成26(2014)年4月時点

- 富永良喜 (兵庫教育大学教授)
- 本間友巳 (京都教育大学教授)
- 山本 奨 (岩手大学教授)
- 定池祐季 (東京大学大学院特任助教)
- 森本晋也 (岩手県教育委員会指導主事)
- 淀澤勝治 (兵庫教育大学准教授)
- 大谷哲弘 (岩手県立総合教育センター研修指導主事)



臨床心理学コース
とみながよしき
富永良喜 教授

いじめと災害ストレスへの心の健康教育と道徳教育と防災教育の包括的教育プログラムの作成と検証

いじめと災害は児童生徒に強いストレスを与え、人生に否定的な影響を及ぼすことがあります。そこで、心の健康教育、道徳教育、防災教育の専門家が協働で授業や活動プログラムを作成することを試みました。この誌面では2つ紹介します。

①災害トラウマの視点を取り入れた高校生へのいじめ防止授業の効果

ある高校の1年生6クラスで1コマの授業を行いました。事前・事後に、この2週間でのいじめ被害行動と加害行動の有無といじめ意識アンケートに回答してもらいました。

災害だけでなく、
つよいストレス(とてもショックな
ストレス・出来事)をひきおこす
出来事があります。それは…



- ◎物をかくす、物をとる、持ち物に落書きをする
- ◎プロレスの技をかけて痛くする、なぐったりける
- ◎いやなあだ名で呼ぶ、悪口をいう、みんなで無視する

授業では、いじめの構造を知る、イライラしたときの適切な表現方法を学ぶ(自己コントロール)、いじめとトラウマを学びました。その結果、いじめ加害得点の有意な減少と、自己コン

トロール得点とトラウマ理解得点に有意な望ましい変化が見られました。しかし、「いじめられる人にも問題がある」といいたいじめの誤った意識には変化が見られませんでした。

②被災地の保護者への防災教育と心のケア研修会

全学年で防災教育と心のケアの授業が行われた後、保護者を対象に研修会が開催され、中学生の時に北海道南西沖地震で奥尻島の津波を経験した定池祐季先生(東京大学防災センター助教)と私が30分ずつ講話をしました。回答を得た25人のアンケートを分析しました。その結果、トラウマ回避へのチャレンジがトラウマの克服に必要なだと初めて知った人が36%でした。また、日ごろの減災・防災活動が生きる力になることを初めて知った人が52%でした。

今後、どの学校でも、心の健康教育・道徳教育・防災教育を融合した年間計画を作成し展開することで、いじめの抑止と災害に強いまちづくりが期待されます。

西條剛志副校長、定池先生と。チューリップはこの高さまで津波が来たことを示しています。防災教育と心のサポート活動を取り入れることで、いじめのない学校を実現しているとのことでした。

